



TITLE:

先史[聚]落地理

AUTHOR(S):

小牧, 實繁

---

CITATION:

小牧, 實繁. 先史[聚]落地理. 地球 1926, 5(4): 298-318

ISSUE DATE:

1926-04-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183086>

RIGHT:

第三の西南部地方の内波斯灣沿岸地方は主にアラブ人の居住地であり、メンボタミア平原に接する山岳地方は、北は剽悍なるクルド人の割據地であり、南は獐猛なるバフチアリ、人又はルール人の巢窟である。

波斯灣沿岸地方の主なる都會は、開港地であるバンダラバス（人口約一〇、〇〇〇）ブシル（人口約三〇、〇〇〇）及び所謂波斯石油の産地に近きモハマラ港（人口約一〇、〇〇〇）であつて、カルーン河上流のシユスター（人口約一五、〇〇〇）及びデズフル（人口約二五、〇〇〇）はカルーン河の御蔭で出來て居る都會である。

クルド人の棲むで居る地方は殊に土地瘠せ、僅に雜草が生える位に過ぎない爲に、住民は大概遊牧を業とし、水草を追ふて天幕生活を營むで居る、其多數の一族耶黨を引率して押し廻はして居る有様は哀れにも亦奇觀である。

## 先史聚落地理

### 小 牧 實 繁

地理學の本體は人文地理學である、と一派の學者は云ふ。然しながら斯く考ふる時從來自然地理

學の名を以て呼稱せられ來りし一派の學問を、學問の系統上何れに歸屬せしむべきかが問題となる。地理學の本體は人文地理學にありとなす如上一派の學者は、恐らく自然地理學の中其の氣象學的氣候學的方面は氣象學氣候學に、地球物理學的地球化學的方面は地球化物理學地球化學に、地質學的礦物學的方面は地質學礦物學に、海洋學的湖沼學的方面は海洋學湖沼學に、火山學的地震學的方面は火山學地震學に、天文學的測地學的方面は天文學測地學に、動物學的植物學的方面は動物學植物學に歸屬せしむべしとなすであらうが、其は餘りに狹量である。

地理學の本體は要するに地理學である。人文地理學が地理學の本體であるのではない。人文地理學が地理學の本體であると云ふは所謂人文地理學者にとりては明かに自家撞着である。自然が人類に與ふる影響、人類が自然に及ぼす影響、此等兩者の統一的綜合的研究が人文地理學である、と人文地理學者は考へるのであるが、其の人文地理學者が自然の研究を輕視して、地理學の本體は人文地理學なり、となすは自家撞着も甚だしい。

地理學の本體は地理學である。天文學地球物理學地球化學氣象學氣候學地質學礦物學海洋學湖沼學地震學火山學動物學植物學其の他尙多くの自然科學の研究により深く自然を理解し、他方政治經濟交通聚落其の他あらゆる種類の人類の生活活動行爲、其の歴史的發達の研究により人文現象を明かにしたる後、自然が人類に與ふる影響人類が自然に及ぼす影響、即ち自然と人類との相互關係を

究明するもの即ち地理學であつて、其は人文地理學ではない。地理學を二大別し、其の研究に於いて人文方面に重心を置くものは之れを人文地理學となし、自然方面に重心を置くものは之れを自然地理學となすべきのみ、人文地理學は地理學の一派であつて、決して人文地理學が地理學の本體であるべき筈はない。

次に自然地理學は地理學の中、重心を自然的方面に置くもので、其は純粹の自然科学ではなく、地理學の重要な一部分をなすが、之れ又勿論地理學の本體ではない。

自然地理學は、人文地理學が自然と人類相關の研究に當り特に人文現象に重きを置くのに對して自然人類相關の研究に當り特に自然現象に重きを置くに過ぎぬ。單なる自然科学ではない。地球を人類の活動舞臺として考へる事なくして試みらるる氣象、氣候、地球物理、地球化學、地質、鑛物火山、地震、海洋、湖沼、動物、植物等の研究は直ちに之れを自然地理學とは呼稱するを得ない。

其は單に其れ等各個に關する自然科学であつて自然地理學ではない。自然人類相關の研究が地理學なりとすれば、人類を考察中に入れざる自然科学は要するに自然科学であつて自然地理學ではあり得ない。自然地理學は地球を自然科学的に研究するものではあるが、其の地球は人類の活動舞臺としての地球である。此の根本觀念を忘却したる場合は、其の研究は要するに自然科学であつて自然地理學ではない。

本誌の讀者は多くは地理學に對すると同様地質學に對しても又多大の興味と研究心とを有せらるると思へるから今茲に地理學殊に自然地理學と地質學との關係に就き一言し、自然科學と自然地理學とが根本に於いて其の性質を異にする所以を論じ度い。

地理學中人文地理學と地質學との間は其の距離餘りに大にして兩者の區別は殆んど常識の問題であるが、自然地理學、地質學間の區別に至りては稍面倒にして輕々常識を以てして簡單に片附ける事が出来ない。然しながら大體に於いて、地質學は地球の組成物質、構造、歴史の自然科學的研究であるが、自然地理學は人類活動の舞臺としての地球の准自然科學的研究であると云へる。然れば地形學の如き地形は地質の研究に當り地質構造の豫察に貢獻する位に止まるから、地質學にとりて然かく重大なる意義を有するものではないのに對して、地形は人類の活動文明の發達等に大なる影響を與へ人文現象に關係する所甚だ大であるから、自然地理學に於いては重要な位置を占むる事となるのである。(勿論地球を人類の活動舞臺と見る事なしに行ふ地形の研究は單なる地形學であつて、自然地理學の部門に入らない)地形學が地質學及び自然地理學の兩者に對して其の意義を異にする如きは單に一例に過ぎないが、此の一例を以て見ても地質學と自然地理學とが各其の立場を異にし其の研究の目的を別にして居るのを知るべきである。

自然地理學研究に當り自然科學的研究に深入りする事は誠に喜ぶべき事象である。其れは聽て自

然地理學の研究を深め其の奥行を大ならしめ其の基礎を確實にする所以であるからである。然れば自然地理學研究に當り地質學的研究に深入りする事は又甚だ可である。此の意味に於いてペンク老教授の研究室にも顯微鏡などは一臺の備付すら無いからとの理由を以て地理學者が岩石顯微鏡を窺ふ必要等はないと單純に片附けて仕舞ふのは勿論早計であるが、地理學は地人相關を研究するものである以上、自然地理學研究者も、人類活動の舞臺としての地球を研究すると云ふ根本の方針は飽くまで之れを念頭に置いて居る必要がある。斯かる立場に立つ事が自然地理學の、地球の組成物質構造、歴史を研究目的とする地質學と其の趣を異にする點である。一人の學者で同時に地質學なり自然地理學なりの研究に没頭するを、無用意に傍觀する時、一見地質學と地理學殊に自然地理學との間何等の區別なきが如く、何等かの區別ありとするも其の區別は甚だ漠然たる如く見ゆる場合もあるが、實際は上述の如き區別が存するものと見る可きである。否斯かる區別ある可しとの理窟はなく、其は結局人爲の思索を以て斯かる區別を存せしむるに過ぎないが、斯く考へる事が甚だ便宜であると主張し度い。

地質學と自然地理學との間本質的に區別の存する事は以上の説述によつて明かとなつたと思ふ。而して此の一例を以てしても自然地理學と一般自然科學とに本質的の相違が存する事は明かであらうと思ふ。

繰返して言ふが、自然地理學は地球を主として自然科學的に研究するものではあるが、其の地球は人類の活動舞臺としての地球である、此の根本觀念を忘却したる場合は其の研究は要するに自然科學であつて自然地理學ではない。而して假りに其の研究が人類活動の舞臺としての地球の自然科學的研究であつて之れを正しく自然地理學と稱し得ても、扱其れは又地理學の本體ではなく矢張、人文地理學に對する、地理學の一派であるに過ぎぬ。

自然地理學も人文地理學も共に地理學の一派である。兩者の中何れが地理學の本體であるのでもない。兩者相倚り相援け一心同體となつて初めて茲に渾然融和せる健全なる地理學は成立するのである。人文地理學は地理學の内でも特に人文方面に重きを置くものであるが、自然現象に對する相當の研究理解なくば其の研究は不健全であり、基礎薄弱たるを免れず、自然地理學は特に自然方面に重きを置くものであるが、人文現象に對する相當の注意理解なくば其の研究は又完全を期し難い。以上の如きが地理學に關する余の根本觀念であり、研究上の基礎信條である。余は地理學の本質、自然地理學人文地理學兩者間の關係を右の如く考へる。地理學の本質に關しては内外諸學者によつて色々と考察せられて居る様であるが、余は先づ右の如く考へるのが最も適當であると信ずる。詳細なる點に亘りて尙種々論じ度い點も存するが其は別稿に譲る事とし、今日は唯右の程度に止めて以下本論に入る事とする。

地理學の重心が自然現象に置かるるか將人文現象に置かるかにより、之れを自然地理學人文地理學の兩方面に分ち得べき事上述の如くであるが、便宜の爲尙之れを時間的に區分する事も可能であると思ふ。即ち過去、現在、未來、三つの時の範疇により地理學を未來、現在、過去に關せしめ之を三分する事が可能である。現在の地理學（勿論實際には最近の地理學と云ふ事になる、即ち少しく過去にも溯る地理學となる）は勿論大なる價值を有し、未來の地理學（即ち未來に於ける人類と自然との相互關係を豫想若しくは豫言するものにでもならうか）又甚だ興味あるものであるが、本稿に於いては専ら過去の地理學を論ずる事とする。

過去の地理學は之れを歴史以後現在に至るまでの地理學と、歴史以前人類の出現より歴史の黎明に至るまでの地理學とに二大別する事が出来る。余は之れを歴史地理學及び史前若しくは先史地理學（Präistorische Geographie）と呼稱し度い。

歴史地理學とは如何なる學問であるか、何を研究の對象となすかと云ふに、其は既に「歴史と地理」第十六卷第五號（大正十四年十一月號）に「歴史地理學に關する私見」と題する拙稿にも論じて置いた如く、歴史地理學とは人類歴史の黎明以後地球即ち詳言すれば氣候水理土壤海岸湖岸潟沼其の他の水平的、垂直的地形動植物界等が如何なる情態に存せしか、又其れ等が自然的に如何に變化せしか、歴史の黎明以後人類が上記の如き自然的條件を如何に變化せしか、上記の如き自然的條



件が人類の活生活働行爲即ち人文現象に如何なる影響を與へしか、自然的人爲的に次第に變化する自然的條件と次第に進歩する人類の人文現象との相互關係は如何なりしか等の事項を系統的綜合的に研究するものであるとなすべきである。歴史地理學に關しても尙詳論し更に前説を補ひ度いと思ふが其れも本論と直接の關係は少ないから尙後稿を待つ事と致し度い。

然らば史前若しくは先史地理學とは如何なるものであるか、何を研究の對象となすかと云ふに、史前若しくは先史地理學に關しても又歴史地理學に關すると略同様の事が云へる。即ち人類の出現以後歴史の黎明に至る間自然的條件が如何なる状態に存せしか、又其れ等が自然的に如何なる變化を受けしか、人類が自然的條件を如何に變化せしめしか、自然的條件が人類に如何なる影響を與へしか、自然的人爲的に次第に變化する自然的條件と文明次第に（徐々にてはあるが）進歩する人類との相互關係は如何なりしか、此等事項の統一的綜合的研究が史前若しくは先史地理學であると云ひ得ると思ふ。

人類の出現以後歴史の黎明に至る間自然的條件が如何なる状態に存せしか、又此等が自然的に如何に變化せしかの研究は必ずしも全く不可能の事項ではない。例へば清野博士の發掘により甚だ明瞭となれる渥美半島貝塚の分布、其の他本邦各地に於ける貝塚の分布により石器時代海岸汀線の情態を推知し得る如き、濱田教授の發掘調査により明かとなれる薩摩指宿石器時代遺物包含上下兩層

間に於ける火山灰層の介在により石器時代に於ける火山活動を推測し得る如き、故坪井博士、鳥居博士等の研究により明かとなる大島野増村海岸石器時代遺物包含層上の熔岩流により石器時代若しくは其の直後に於ける三原火山の噴出を察知し得る如き、山崎博士の踏査研究により明かとなる房總半島東南部守谷辨天崎兩洞窟に於ける有史以前遺跡の状態により史前に於ける海岸地盤の隆起沈降を證明し得る如き、徳島市城山の洞窟及び市外三谷出土の所謂丸木船の研究により史前に於ける吉野川下流海岸線の状態を推察し得る如き、越後北蒲原郡金塚村貝塚の研究により當時に於ける舊紫雲寺瀉の状態を推知し得る如き、羽後男鹿半島角間崎貝塚の調査により石器時代に於ける八耶瀉附近トンボロ式地形の存在を想像し得る如き、古くは大森介墟の研究により史前に於ける東京灣生物界の状態及び其の後の變化を推測し得る如き其の一例であつて、斯かる例は我國に於いて尙多く發見せらるる所であり諸外國に於いても又其の例に乏しくはない。

次に人類が有史以前に於いて自然的條件を如何に變化せしめしかに關して、先史人類は人文未だ進歩せず人知足らざりしならんを以て、今日文明世界に見る如き大規模の人為的自然條件の變化は甚だ少なりしならんも、何等かの程度に於ける變化の存したらん事は、靈長動物以外の動物が今日現に自然的條件を幾分にも變化しつつあるに見るも明かである。唯先史人類の作用による自然的條件の變化を如何なる手段によりて發見し得るか、之れ今後に於いて深く研究すべき問題である。

次に自然的條件が先史人類に對し如何なる影響を與へしかは最も興味ある研究題目である。即ち先史人類は人知未だ進歩せず文明甚だ幼稚なりしを以て、従つて自然的條件の影響は現今文明人に比し幾分多分に之れを蒙らざるを得なかつたであらうから、其の跡を追求する事は甚だ興味ある所である。唯此の時代に關して今日吾人の知り得る所は、云ふまでもなく文字を通じてではなく遺物即ち人類自身の骨格、使用器具又は武器たりし石器土器のみを通じてであるから、此等遺物より人類が自然的條件に如何に影響せられしかを知る事は相當困難な事業である。然しながら例へば海岸若しくは湖岸の遺跡より多數の錘石、骨角製鈎針等が発見せられ、之れによつて石器時代住民が其の生業に於いて海洋湖潟なる自然的條件に影響せられたるを知り得る例もあるから、深く研究を進むれば其の他案外興味ある事實が発見せられるかも知れぬ。人類の聚落に關しては尙後に論ずる。

自然的人爲的に次第に變化する自然的條件と人知文明次第に進歩する人類との相互關係の研究は史前時代に關しては稍困難なる事項ではあるが、不斷の研究を以てすれば其は永久の不可能事ではない。

以上説述する所により先史地理學とは如何なる學問であるか何を研究の對象となすべきかが明かとなつたと思ふ。

而して史前時代に於いて自然的條件が如何なる情態に存せしか又自然的に如何に變化せしかの研究

究は先史地理學の研究中自然地理學的研究方面であり、史前人類が自然的條件により如何に影響せられ又之れを如何に變化せしかの研究は同じく人文地理學的研究方面であるから、史前地理學は又歴史地理學と同じく之れを自然地理學的人文地理學の兩方面に別つ事を得ると云へる。

以上論述する所により、地理學は其の重心の置き所により之れを自然地理學、人文地理學の兩方面に分ち、之れを時代的に區分して歴史地理學、史前若しくは先史地理學の二となし、更に之れを自然地理學的、人文地理學的の兩方面に區分し得る事が明かとなつたと思ふ。

扱人文地理學の内で重心を人類の聚落現象に置くものは之れを聚落地理と稱する事周知の事實であり、其の學問が立派に存在の理由を有する事も又多言を要すまいと思ふ。然らば此の聚落地理と史前地理學との切合を考へ之れを史前若しくは先史聚落地理と呼稱する事が出来る。其は人文地理學の一方面たる聚落地理の研究を遠く先史時代にまで溯り行ふもの、換言すれば先史地理學の内人文地理學的方面に含まるべき聚落地理的方面であつて、余は之れに命ずるに先史若しくは史前聚落地理の名を以てし、若し之れを獨譯でもする場合に之れに *Prähistorische od. Vorgeschichtliche Siedlungsgeographie* の術語を與へ、今日に於いて其の研究を提唱せんと欲するものである。

然らば先史聚落地理に於いては何を研究の目的となすべきか、又其の研究は可能なりや。此れに對する完全なる回答は必ずしも容易ではない。然しながら余は此の方面の研究を提唱する以上一言

之れに言及すべきの責任と義務とを感ずる。

先史聚落地理に於いては、先史時代聚落が地球表面上に如何に分布し、又局部局部に於いて如何なる形態を有せしか、聚落の發達、換言すれば其の分布形態密度等が自然的條件により如何に影響せられしか、即ち人類は其の聚落に於いて如何に自然的條件に影響せられ、之れに適應し之れを利用せしかを研究すべきものと思ふ。

然らば斯かる研究は果して可能なりやと云ふに、其は全然不可能ではない。先づ第一に世界各地に於ける先史時代人類聚落の遺跡を調査し、若しくは從來調査せられたるものを利用し、之れを地圖上に記入し、其の世界に於ける分布を大觀し先史時代聚落が地理的位置、氣候、地質、地形、海洋、湖沼、河川、地下水、動植物界等の自然的條件と如何なる關係を有せしか、此等自然的條件より如何なる影響を蒙り、如何に之れに適應し、之れを利用せしかを研究する事は理論上必ずしも困難ではないのみならず又甚だ興味ある所である。地球上各地の先史時代聚落を調査する事は事實困難であり、今日地方によりては其の調査の全く試みられて居らぬ所もあるから、從來既調査の聚落のみを地圖上に記入し之れのみを大觀しての結論は未だ必ずしも完全とは稱し難いけれども、追々未調査地の踏査に向つて努力する事は纏て斯學の進歩を促す所以とならう。差し當り歐洲例へば佛蘭西、獨逸、西班牙、伊太利、英國、バレンスチン、瓜哇、支那等に於ける舊石器時代遺跡を地圖

上に記入し、其の地の自然的條件を研究し、自然的條件と舊石器時代聚落との相互關係を明かにし續いて新石器時代各地の遺跡に就いて同様の研究を試みる事が必要であり又興味も深からうと思はれる。一例ではあるが舊石器時代人類は石灰岩地方の洞窟(cave)若しくは海蝕洞中に寒冷なる風雨を避けたるが如き聚落地理研究上可なり興味ある事實を暗示するものではなからうか。

次に局部的に見て先史時代聚落が如何なる形態を有せしか等は然かく精確には知り得ないかも知れないが、或は地形水理其の他の條件に影響せられ何等か特種の形態を呈するに至れる事實が判明するかも知れない、例へば原始人類は水の便よき谿を隔て、谿に沿つて細長く住居を並べたとか、臺地と平野との推移線に沿つて聚落したとか、海岸線湖岸線に沿ひ細長き聚落を形成したとか云ふ事が考へられるから、簡單なる事ならば自然的條件と關係する先史聚落の形態論も出來ると思ふ。

次に先史聚落の發達が自然的條件によつて如何に影響せられたか、人類が聚落に於て如何に自然的條件に適應し之れを利用したかも、先史遺跡を地圖上に記入し或は實地に踏査する事により明かにする事が出来る。例へば本邦裏日本海岸に於いて石器時代遺跡は矢張海岸の平野附近に多い傾向を示して居り、之れにより石器時代に於いても矢張り聚落は大體平地に發達した事が知れ、然しながら平地は低卑濕潤で生活に不便であつたから聚落は幾分丘陵又は山麓に片寄り發達した様な傾向が認められ其の他、其の地其の地に於いて種々なる事實が認められ、之れにより聚落が自然的條件に

より如何に影響せられ又如何に之れに適應し之れを利用せしかの關係を知る事が出来るのである。

以上に説述する所により、先史聚落地理の本質、其の研究の不可能ならざる事、従つて其の學問としての存立の可能なる事、其の研究の唯に不可能にあらざるのみならず、多分の興味ある事、換言すれば地理學の一分科として充分の存在理由を有する事が明かとなつたと思ふ。學問の研究は元來型に嵌めて行ふべきものではないから、上述の如き先史聚落地理の型に嵌まる様、研究が行はるべきものと主張する意志など毛頭ないが、余が上に先史聚落地理と呼稱するが如き學問分科の研究は必ずしも無用の業ではないと云ひ度い。余の考ふる如き先史聚落地理が余の考ふるが如き體系に於いて研究せられん事を強要する譯ではないが、斯かる方面の研究が忽諸に附せられない事は切に冀望に堪へない所である。

云ふまでもなく人類は時代を溯るに従ひ其の知識は進歩せず文明は發達して居らないのが常であるから、人類が自然的條件の影響を被り其の支配を受ける程度は時代を溯るに従ひ次第に大であり之れに適應を餘儀なくせらるる程度も歴史時代より先史時代、先史時代に於いても新石器時代より舊石器時代に溯るに従ひ次第に大となり、反之人類が自然的條件に與ふる影響は反比例して益々小となるのであるから、人類が自然的條件より蒙る影響は先史時代に於いては歴史時代に於けるより顯著な譯であつて人類が自然的條件により如何に影響せられるかを研究の一大項目とする人文地理。

學に於いて、人類が自然的條件により如何に影響せらるるか、顯著なる場合を知らんと欲せば、先史地理學的研究に俟つが最も有利であり又最も便宜である。

單に人文地理學に於いて時を先史時代に溯り、先史人文地理學の研究を試みるのが有利であり便宜であるとの便宜上の事情を度外視し、之れを純理論上より考ふるも、人文地理學が人類自然の相關を問題とする以上は其の研究を人類祖先の出現まで溯るが至當である。

背景に歴史を有せざる人文地理學は、喩へば砂上の樓閣にも等しからう。外觀如何に壯麗であらうとも、構造如何に完全であらうとも歴史の基盤なき人文地理學は之れを安全とする譯には行かぬ。此の意味に於いて從來歴史地理學なるもの存し、兎まれ角まれ研究が進められて來た事は甚だ意を強うするに足る。人文地理學の背後には必ず歴史がなくてはならぬ事多言を要すまいと思ふ。其は何人によりても承認せらるる事と思ふ。

人文地理學の研究は時間的に歴史時代にまで溯らなければ安全と稱し難い。出來得る事なら歴史の黎明まで溯らなければ不安である。然れば歴史に應じ歴史地理學の存したるは寧ろ當然であつた。然るに、歴史に應じ地理學の一分派に歴史地理學存したるに對し、何故に考古學殊に先史考古學に應じて地理學の一分派に先史若しくは史前地理學が存しなかつたのか。之れ一の不可思議ではないか。



地理學は人類自然相關の研究を目的とするものである。而して人類は既に洪積世に出現して居り決して歴史と共に出現したものではない。而して地理學は時間的に溯つて歴史時代の研究を試み、其の一分派として歴史地理學なるもの存するに對して、歴史以前の地理學即ち史前若しくは先史地理學の研究が今日まで殆んど省みられなかつたのは寧ろ大なる不可思議とせざるを得ない。從來駸々として進歩し來れる考古學殊に先史考古學の提供する幾多資料に對して何等の顧慮を拂ふ所なく之れを徒らに放置するは地理學者として甚だ心なき業であつて、考古學者に對して甚だ面目なきのみならず、理論上より、人類自然の相關を研究する地理學に於いて、歴史地理學には一瞥を與ふるも、先史地理學に關しては其の本質、存在理由に就いてすら考察を拂はず何等顧みる所なきは確かに地理學者の片手落ちである。

聚落地理は人文地理學の一分派であるから、人文地理學一般に就て云へる右の議論は直ちに以て聚落地理にも適用する事が出来る。殊に聚落には永續性が認められる。歴史時代聚落の跡には現在多くの聚落が發達して居る。歴史時代聚落の中には先史時代聚落の跡に發達して來たものが甚だ多い。即ち先史時代聚落は其の後歴史時代を經過して現在に至るまで永續して居ると云ひ得る。勿論現在の聚落は石器時代聚落其のままであり得ない。然しながら石器時代に初めて聚落の形成せられた地點若しくは其の附近には、其地の自然的條件の良好なるにより且説明し難き傳統的感情によ

つて代を重ね年を闊しても聚落が永續せられて來たのである。其の例は甚だ多い。出雲大社、能登一宮、羽後一宮附近に多數の石器發見せられ、古墳存し、傳統的に最古の神社鎮座し、此所に現在の聚落發達せる如き其の一例に過ぎぬ。斯くの如く聚落に永續性存するものとすれば、聚落地理の研究は必然的に先史時代まで溯らなければならなくなる。即ち先史聚落地理の研究は必然的にも没却すべからざるものとなるのである。之れ今日「地球」の「聚落號」の發行に際し敢て先史聚落地理研究の興味と必要とを提唱する所以である。

差し當り吾人の眼前には本邦先史聚落地理の研究が横たはつて居る。吾人は本邦に於て既に調査せられて明かとなつて居る石器時代遺跡より當時に於ける聚落の位置を推測し之れを二十萬分一帝國圖若しくは五萬分一地形圖、能ふる限りは二萬分一地形圖に記入し、尙能ふべくんば一々親しく之れを實地に踏査し、之れと周圍の自然的條件との關係を明かにする事が必要であり又最も興味の深き所でもある。

幸從來本邦各地に於いて發見せられた石器時代遺跡遺物の表が「日本石器時代人民遺物發見地名表」として東京帝國大學理學部人類學教室より發行せられて居り、大體之れに因つて本邦先史時代聚落の位置を知る事が出来るから、之れに因り知り得る先史聚落の位置を地圖上に求め、之れのみにより其の位置正確に知り難きものは一應之れを嘗て雜誌其の他に掲載の記事に照合し、尙其の位

置不明なるものは親しく實地踏査を遂げ然る上地圖上に記入すべく、尙該地名表に漏れたるものを他の著書報文雜誌等所載記事によつて補ひ、其の後發見のものを人類學雜誌、考古學雜誌、其の他史學地理學關係の専門雜誌其の他の著書報文等により補充すると同時に又親しく實地調査により新發見地を加へ、之れにより聚落分布圖を作成し、聚落と其の自然的條件との關係を見るべきである。其處に何等か興味ある事實が見出さるる事疑を容れない。

然しながら實際の作業に於いては幾多の困難なる問題に遭遇するに相違ない。例へば遺跡の地圖上記入に於いて遺物の散布地を如何に處置すべきかの如き難問題の一である。然しながら此の問題に對しても解決の方法は絶無でない。即ち遺物散布地と雖も、該遺物が直接其の地の舊遺物包含層の攪亂により其の附近に散布するに至れる事明かとならば（其の場合々の事情により斯く判斷する事が可能なる場合も甚だ多いと思ふ）該遺物散布地は之れに遺物包含地と略同等の權利を有せしめ、其の附近の地を以て先史時代聚落の位置と決定し之れを地圖上に記入するも不可ないであらう。先づ第一次の作業は遺物包含地及び遺物包含地に準すべき遺物散布地を或る何等か一定の記號を以て可成的正確に之れを地圖上に記入する事である。

次には如上の遺物散布地より稍價值を少くする遺物散布地を別の記號を以て同地圖若しくは別地圖に記入すべく、唯餘りに偶然なる遺物發見地は科學的正確を期するため先づ記入を差し控へ之れ

は別に書留むる程度にすればよろしからう。

次に問題となるは、豊富なる遺物包含地若しくは發見地と貧弱なる遺物包含地若しくは發見地との區別を地圖上に於いて如何なる方法を以て示すべきか、である。之れに對して、遺物の個數を單位として此れを以て其の密度を示し、人骨一體は遺物の數單位若しくは其れ以上の若干單位に匹敵せしめんとする方法も考へられざるにあらざるも、斯かる方法は今日暫らく考へざるを便利とする。何となれば、如斯く遺物の濃淡を數量的正確に區別せんと欲せば茲に幾多の困難なる事情に遭遇し、結局中止の止むなきに至るからである。例へば、石器の場合は然らざるも、土器は多く破片として出土するを以て、之れを接合完形に複原し得る場合は別とし、複原し得ざる場合、個々の破片を如何に處置すべきか、之れ一の難問であり、又石器骨角器等は之れを計算する事比較的容易なれども石鏃、石槍、石劍、石斧、石棒、石匕、凹石、錘石、其の他各種の石器骨角器の一個は聚落住民の密度を示すに果して同一の價值を有し之れを同單位と思考して不可なきや、之れ又一の難問であつて之れを強いて數量的に取扱ふは却つて無意義の業に終るの恐れがあるからである。寧ろ今日に於いては、遺物比較的多數或は少數の程度を以て區別するの却て賢明なるを知るであらう。

斯くの如く比較的簡單なる區別を以てしても、茲に多少の興味ある事實を推知し得る事となる。即ち遺物の比較的多數に發見せらるる地は、茲に比較的多數の住民居住せしか、或は聚落が比較的

長年月に亘り永續せしか何れかにして、之れに反する地は其の事情を逆にすべく、多數遺物の發見は、住民多數なりしか或は聚落永續せしかの何れの場合たるを論せず、結局は其の地の自然的條件が良好なりしを示し、聚落と自然的條件との相關の研究に際し重要な意義を有するを知るのである。

次に或る聚落に如何なる人類が居住せしか、即ち聚落形成者たりし人類は何人種なりしかは勿論全く度外視する事は出来ない。然しながら人種分布論を目的とするのでない場合は、之れに或る程度の注意を向くるを以て足れりとする。即ち日本の石器時代遺物は全體細紋土器系統彌生式土器系統に二大別する事が出来るのであるが、此等兩系統の遺物が互に異なる兩人種の残せる遺物であるとしても、自然的條件が此等兩人種の聚落に對し各顯著に異なる別種の影響を與へたとは考へられなから、先史時代聚落と自然的條件との相關を考へる先史聚落地理に於いては暫らく兩人種の差別を度外視するも大して差支へはないからである。殊に兩種遺物は全く人種を異にせる住民の遺物ではなく唯文化の程度を異にせる略同人種の遺物と考へる場合は尙更である。然しながら兩系統の遺物が同所兩層より發見せらるゝが如き場合は、之れ即ち聚落の永續性を示すものであるから、其の點には抜け目なく注意を拂ふ必要ある事勿論である。要は臨機應變である。

今日までに先史聚落地理研究の方法に就いて考へ及んだ所は大體右の如くである。尙幾多考ふべ

き點もあらうが、其は研究の作業中追々に考へ付く事と思ふ。最初は大體の方針さへ定まつて居れば大した不都合はないので方法は作業の進捗と共に追々に考案し得ると思ふ。先史聚落地理の本質と存在理由並びに研究の方法は今日に於いては大體上の如く考へ置いて差支なく、目下の急務は其の研究への着手である。本誌聚落號の發行を機とし聚落の研究益々隆盛に赴くと共に熱心なる讀者の中より一人でも聚落地理殊に先史聚落地理の研究に興味を寄せ余の考へ又は作業に共鳴せらるゝ篤學の士が現はれ來らん事は余が切に冀望に堪へない所である。重ねて云ふ、地理學の本體は自然地理學でもない、人文地理學でもない、地理學の本體は要するに地理學である。地理學は人類の人文現象と地球の自然的條件との相互關係を研究するものである。重心の置き所により之れを自然地理學人文地理學に、時代的に歴史地理學先史地理學に區分し得る。人類は歴史の黎明と共に始まるものではなく既に洪積世に出現し史前時代を經過して來た。地理學の一分派に從來歴史地理學の存せる以上理論上より先史地理學が存在しても差支ない、否存在の必要がある。先史地理學の研究は決して没却すべきでない。切に篤志家の研究を望まねばならぬ。而して先史聚落地理は先史地理學中に於いて確かに興味と必要とを有する研究の一方面である。